

2016/10/15 神戸市役所 4 号館(危機管理センター)1 階会議室
報告書作成者：神戸大学北後研究室 田中宏幸

「建材からのアスベスト飛散リスクとその対応」

三田市防災インストラクター 山本 信一

■ 講演内容

消防隊員の安全管理・健康有害性の防除の視点から消防活動とアスベスト(石綿)リスクの対応について講演して頂いた。

はじめに、アスベストとは繊維状珪素塩鉱物の総称であり、その繊維は極めて細い。耐久性、不燃性、耐熱性、絶縁性などに強い理由で、1970年代後半から1980年代にわたり大量に輸入され、その多くが建築資材、自動車、電気製品など様々な分野で使用された。しかし、国内では2005年のアスベストを取り扱っていた尼崎市の工場周辺で、市民を含めた70人以上の人々が中皮腫で亡くなった。世に言う「クボタショック」で社会問題化した。それによって、アスベストは「魔法の鉱物」から「悪魔の鉱物」に一変したのである。

阪神・淡路大震災の際もアスベストが問題となった。瓦礫の片付けをしていた解体作業員が、後に中皮腫で死亡したケースがある。平時であれば厳重に管理されていたが、緊急時であったということもあり、まともな措置が取られないまま、解体作業をしてしまったことが要因と考えられる。アスベストの潜伏期間は20年～40年と長く、震災が社会に長期的にもたらす影響として、見落としがちな問題の一つと考えられる。

今年4月の熊本地震の際にも、損壊ビルのアスベスト調査の結果、140件の内、2件が基準を超えた。また、少なくとも損壊18棟でアスベストが露出していた。さらに、熊本市は地域防災計画にアスベストに関する防止策は規定されていない。

このような事例からわかるように、現存する建物にアスベストが多く使用されている中、アスベストの正確な知識

を持ち、消防隊員の安全を確保し、市民の負託に応えるべく、消防活動に適切に対応しなくてはならない。また、アスベストを一度吸い込むと、潜伏期間が長く急性毒性を持たない分、他人事のように思ってしまうが、自分事であると意識する必要がある。以上のことをふ



山本信一さん

まえ、現状での消防活動に伴うアスベストリスクの対応として、以下の対応が有効であると考えられる。

- 1)地震・火災などの災害時のアスベスト飛散防止策を地域防災計画で規定すること。
- 2)第一に消防隊員自らがアスベストの有害性を知識として共有すること。
- 3)管内のアスベスト使用建築物を把握すること。
- 4)災害時に活用するため、把握した建築物の情報共有の仕組みをつくり機能させること。
- 5)上記3)建築物の場合は、火災時にアスベストの空中での繊維数を測るために数力所の定点測定を実施すること。
- 6)火災発生建物の消火戦技としてのパワーコーン放水(形状がコーン状の大量の水霧射水放水)がアスベストの飛散防止に効果があると推定できる。
- 7)フルフォグ放水(360度の円状の水膜を張る放水)により、火災・煙と併せてアスベストの飛散を防ぐ効果があると推定できる。
- 8)アスベスト含浸固化剤を活用して無害化を図ること。
- 9)個人装備として、防塵マスク・電動ファン付き呼吸用保護具を常備すること。

10)火災現場の撤収時は、現場外套は密封性のバッグに入れ、帰署次第にクリーニングすること。

■ 主な質疑応答

・消防隊員のアスベストを含めた様々な安全管理は徹底して行われていると思いますが、消防団員の安全管理は現状、どのようなになっているのでしょうか？

⇒ 綾部市の事例では、綾部市にはため池があり、そこで何か起きた場合、救助活動の際に消防団員が溺れる可能性があるため、消防団員にライフベストを配布済みです。このように、他の地域でも消防団員の安全管理は最重要課題として、徹底して行われていると思います。

・アスベストが含まれている建物の解体の際、誰がどこに届け出をするのでしょうか？

⇒兵庫県では、兵庫県のホームページ上で公開されています。

・災害などの際、自分の身を守ることが非常に大切であると思うのですが、どのようにお考えでしょうか？

⇒その通りだと思います。自分で身を守ることが第一に重要であると思います。自分を守れない者は、家族も守れないし、仲間も守れない。また、地域の人々も守れない。